

復興庁男女共同参画班は、令和元年11月17日（日）、岩手県及び岩手県男女共同参画センター主催、「いわて男女共同参画サポーター養成講座」の一環として、「いわての復興・防災に男女共同参画の視点を活かそう」を開催しました。岩手県内の各地から29名が参加されました。

■ 事例紹介 岩手県と宮城県における男女共同参画の視点を活かした事例を紹介しました。

岩手県 『女性の視点から被災地のニーズを捉える事業 特定非営利活動法人参画プランニングいわての取組 「芽でるカー」の紹介』 復興庁男女共同参画班

- 津波被害にあった岩手県沿岸部では、仮設住宅の建設は丘陵地が多く、高齢者や障害者、赤ちゃんがいる母親など「災害時要支援者」と言われる住民には、日常の買い物に困難な状況にあった。それを支援する取組を特定非営利活動法人参画プランニング・いわてのスタッフが行った。
- 取組の通称は「芽でるカー」。平成23年8月～平成27年3月までの3年8か月間、岩手沿岸部の5ヶ所で実施、約20名の女性が活躍した。
- 安否確認も含め、災害要支援者たちのニーズを把握し、買い物代行を通じて、必要に応じたパーソナルサポート（福祉課等の行政との連携など）にも及ぶことができた。
- スタッフがすべて地元の女性だったので、訪問時声をかけた時に親近感を覚えてもらい、安心感を与えられた。
- また、「芽でるカー」で働くスタッフ自身も被災者だったが、地元で安定した雇用が得られ、経済的自立や起業の準備期間として過ごすことができた。
- この活動が、支援される側、する側の両方にとって、被災地の課題解決の一助となった。



宮城県 「男女共同参画と復興・防災」 特定非営利活動法人イコールネット仙台 代表理事 宗片恵美子氏



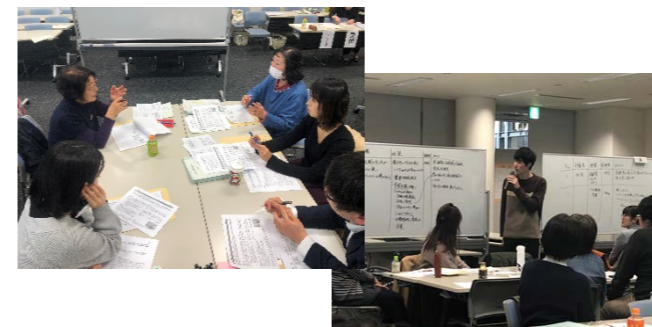
- 特定非営利活動法人イコールネット仙台は、東日本大震災が発生する前から、男女共同参画社会の実現に向けて、生活すべてをテーマに幅広く活動をしていた。特に防災・災害復興には男女共同参画の視点が重要なテーマと捉え、ネットワーク形成を目指している。
- 2008年には多様なライフスタイルで暮らす女性たちを対象に「災害時における女性のニーズ調査」を実施し、結果を「女性の視点からみる防災・災害復興に関する提言」にまとめ、各地域や自治体等で提言活動を行った。
- 発災後には、避難所・仮設住宅での支援を実施。避難所では、「運営リーダーは多くが男性で、女性の声（要望）が届かない」「仕切りが設置されない、授乳室がないなどのプライベート空間が確保されていない」「避難所での男女の仕事の割当が非合理」など様々な課題があるなか、女性のニーズを掘り起こして、「女性による女性のための支援」を行った。
- 女性の被災時・復興時の実態を把握するため、発災直後、『東日本大震災に伴う「震災と女性」に関する調査』を実施。宮城県内の約1,500人の女性の声を収集し、当時の課題と解決、被災地の女性たちの当時の記録をまとめることができた。2013年にはライフスタイルの異なる40人の女性たちから、発災後の状況をヒアリングし、「40人の女性たちが語る東日本大震災」をまとめた。これらから、「男女共同参画の視点からみる防災・災害復興に関する提言」をまとめた。
- 2013年からは「女性のための防災リーダー養成講座」を実施し、3年間で100名の女性防災リーダーを目指し、地域防災の担い手となる女性の人材を養成した。
- 宮城県内広域での講座を開催し、女性防災リーダーネットワークを設立。研修会や情報交換会を通じて、防災のスキルアップを目指しながら、自立した地域活動の推進のほか、地域を越えてメンバー同士が支え合うネットワークが広がっている。

■ ワークショップ

29名が6つのグループに分かれ、架空の新設災害復興住宅のコミュニティ形成事業（施策）についてアイデアを出し合いました。

グループワークで出たアイデア

- 復興住宅の住民と地域住民の合同で自治会を作る。多くの女性が参加できるような呼びかけや多くの女性に役割（代表者）を与える。男性の立場、女性の視点に留意する。
- 住民間の交流の場として、毎月誕生日会を開く。前月誕生日の住民が次月の担当となり、自分の得意分野（ものづくり、料理等）を活かして、会を工夫する。
- 集会所は、多世代が利用し、世代間交流ができるように改修、整備する。
- どんな人が住んでいるのか知るために、住民調査（訪問式のアンケート）を行う。
- 声を掛け合える関係づくりのため、回覧板（情報共有）を利用する。
- 集会所と中庭を利用し、シニア世代（農業経験者）が先生になって住民に農業体験教室を提供する
- 復興住宅の住民で花や果物を育て、販売する。販売する人（女性がリーダー）、栽培する人（男性）がそれぞれ役割をもって、達成感をえられるようにする。
- 子どもへの学習支援（学童）は、当初は専門家（NPO法人）が主体+シニアから開始し、住民間の交流の進捗状況に応じて、運営を徐々に住民に移行する。運営のために実行委員会をつくり、組織化する。
- 外部との交流を増やし、引きこもり防止や健康維持の対策として、子どもたちをリーダーにして、ラジオ体操を行う。
- 外部の人も巻き込んで、イベント（地引綱やマラソン大会）を開催する。参加費は地域の施策の資金として活用する。



ワークショップのフィードバック

宗片恵美子氏

- どのグループの事業（施策）も男女共同参画の視点を活かして、アイデアとして良かったと思う。
- 誕生日会など、コミュニティの活性化には「楽しい」ことを組み合わせるのが効果的である。

- また、住民間で情報、交流がないときに、住民調査（訪問アンケート）を行い、情報を収集することは大切である。
- 回覧板の活用は、意外に効果があるかもしれない。内容を楽しいものにして、自分のやりたいことを提案したり、楽しいイベントを開催するなど集会所の利用の幅を広げ、住民から要望（声）が出てくれば、コミュニティ施策としては良い状況である。
- 産直市の施策では、栽培する人（＝男性）、販売する人（＝女性）と役割分担をしているグループがあったが、男女共同参画の視点からは性別による役割分担はないのが良い。
- 子どもへの支援（学童）に、外部の力を借りるという案は大事な事。自分達だけで解決しようとせず、いろいろなボランティアなどがいるので、軌道に乗るまでや自立運営ができるまで外部の力を貸してもらっても良い。
- 自分の経験から、施策に参加してもらうには、住民のそれまでの経験を活かしたものができると良いと思う。農業経験者がいれば、農作物を作って、それで子ども食堂をやるとか、子どもたちやそのコミュニティの方々が参加できるものにするが良い。人は「楽しいものに足が向く」、「美味しいものに足が向く」。
- 現実に事業を行う際には、組織や資金をどのように運営・運用していくのかという問題が発生し、それに対応していくことになる。



■ 閉会挨拶

復興庁男女共同参画班 鈴木参事官補佐

本日は「男女共同参画」の分野で長年にわたって多大な活躍をされている宗片様のご講演と、実際に復興・まちづくりにおいて、「男女共同参画」の視点を活かした具体的な施策をグループワークすることで、参加者の皆さまが今後サポーターとして、岩手県の男女共同参画を推進されるヒントとなるよう、そして岩手県のさらなる復興や未来づくりを後押しするために開催しました。

「男女共同参画の視点」と一言と言っても、改めて難しく感じるころもありますが、このようにいろいろな年代の方が男女混じって課題解決について一人ひとりが意見を話し合い、議論し合う場面は、「男女共同参画」を推進・継続できる秘訣のように感じました。まさに、これからの社会づくりに欠かせないものと思います。